



駒込病院の門に入ると、一番先に出迎えてくれるのがクスノキです。幹は二人で手をつないでも届かないほど太く、見るからにどっしりとした巨木です。病棟と並んでいる車路にも大きなクスノキが一行に何本も並んでいて、駒込病院のシンボルのようです。葉っぱが艶々していて、香りがある、一年中緑の姿を見せてくれます。クスノキはクスシ(薬師)と同様に、クスリノキ(薬木)という由来もあるとか。病院に相応しい樹木ですが、それだけではなく、堂々として、力強く、頼もしく見えるのも、病院の力を表現しているようにも感じます。

駒込病院は、日本でコレラが流行った明治初期に、東京市が患者を隔離して治療するために、近くに火葬場がある場所を選んで、1879年(明治12年)に「避病院」として設置したというルーツがあるといわれています。下町っ子は「ヒ」という文字を「シ」と発音しますから、「避病院」は「死病院」になってしまい、感じ悪かったのでは…設立当初から感染症患者を治療し、かつて日本で初めて性感染症であるエイズ(後天性免疫不全症候群)の治療を始めたという伝統を持っています。



コマドリ

現在は「がん・感染症センター都立駒込病院」という名称になりました。病院が発行している情報誌「Robin(ロビン・駒鳥)」の最新号は「感染症を正しく知って予防しよう!」を特集しています。夫は悪性リンパ腫で1回目の抗がん剤治療に入って一週間ほどで高熱を発し、これが1週間ほど続き、非常に苦しみました。検査の結果、感染症が疑われ、原因はカビだと分かりました。さっそく

抗真菌剤が投与され、徐々に熱は下がりましたが、頭、歯、口腔、眼なども検査を受けました。

「Robin」によれば、元々、ヒトの身体には100兆個を超える細菌が共存しており、そのような細菌を「常在菌」といいます。それらの大半は、通常身体に害を及ぼすことはなく、腸にいる乳酸菌のように身体の外から侵入してくる細菌の繁殖を抑える働きがあります。しかし、がんの治療に伴う様々な薬の使用や、加齢による体力低下で免疫力が低下すると病原性の低い常在菌が増殖して病気を引き起こすことがありますと書かれていました。カビは真菌と呼ばれる微生物で、どこにでも存在しています。一般的な細菌検査は1、2日で結果が判明しますが、真菌の培養期間は長くかかります。菌が0になるまで、次の抗がん剤治療は危険であると判断されました。毎日のように「あと1週間くらい」と検査の結果が出るまで待つ日が続きました。ところが夫のがんは高悪性度で進行が速いため、待っていただけません。主治医、担当医は増殖を抑えるために繋ぎの処置として放射線治療を勧めてくださいました。5回の放射線照射は軽めの処置だということです。放射線治療を受ける日の前日、培養していたカビ(真菌)が0となりましたという結果報告を受けました。これを聞いて私は本当にほっとしました。抗がん剤サイクルの2回目を受けるために、体力がなければなりません。かなりの日数が過ぎていますが、この期間、食事を取って、体力をつけたいものです。

夫は特別不潔にしている人ではありませんでしたが、学生時代、学寮で赤痢が集団発症し、普段から潔癖、清潔、神経質の友人たちが罹り、自他ともに不潔と認める親友のKさんはじめ、夫、友人たちは罹らなかったと笑い話をしていました。夫は風呂好きですし、いつも外出から帰ると手洗いを励行し、換気をし、食べ物などにも気をつけていましたので、感染症になったのは残念でした。



白血球減少による免疫力低下、加齢のせいでしょう。加齢は止められませんが、免疫力はつけたいと思います。妹がビタミン B₂、B₆、R1ヨーグルト、ブロッコリー、チーズがいいと教えてくれました。今日から常食になり、平穩に過ごせるようになって、ホームページ掲載のために、文書を書き始めているのは幸せなことです。